



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4247 号 2018.3.8 発行

平昌パラ 視覚障害者向けに生中継 NHK、臨場感言葉で 毎日新聞 2018年3月7日
9日開幕の平昌パラリンピックで、NHKは音声多重放送の副音声を活用し、視覚障害者向けの実況中継を放送する。研修を受けたベテランアナウンサーが臨場感あふれる言葉で生中継し、健常者の家族と一緒に「同じテレビを囲んで楽しみたい」という視覚障害者の願いに応えた。五輪・パラリンピックでは初の試みだ。

平昌五輪でも5競技で導入された。パラリンピックではほぼ1日1競技に拡大される。

副音声はどんな中継になるのか。2月17日の五輪フィギュアスケート男子では、羽生結弦が金メダルに輝いたフリーの演技を、副音声では「体を丸めて、まるでコマが回るようなスピンです」などと表現。演技後も「あっ、痛めていた右足を押さえるような仕草がありました。大きく息をしています。本当に苦しそうな表情です」と続けた。これらの場面で主音声はほぼ無音だった。

NHKは開幕前、スポーツ中継の経験豊かなアナウンサー6人に特別の研修をした。講師を務めた全盲の落語家、桂福点さん（49）は、選手のユニホームの色や表情を伝える▽ルールや動きを易しく説明する▽競技中の音や歓声を生かす—ことを求めた。色を認識したことのない人にも分かるよう「燃えるような赤」などと、視覚以外の感覚で説明する工夫も指導した。

「最初はどうやるか全く分からなかった」と小原茂アナ。新人時代に「見れば分かることはしゃべるな」と教わったアナウンサーの基本に反したからだ。五輪本番では女子のスキー・ジャンプやカーリングなど注目競技で副音声の実況中継を実施。福点さんは「見えなかったものも見えた」と評価した。一方でルールや専門用語をさらに丁寧に説明するなどの課題も浮かんだ。これを生かし、パラリンピックでは開会式、閉会式やアルペンスキー、スノーボード競技の一部を副音声で中継する予定だ。

NHKは、目や耳に障害のある人や高齢者らを念頭に「人にやさしい放送」の実現を目指し、字幕・手話放送を増やしている。その一環から、2016年夏のリオデジャネイロ・パラリンピックではハイライト番組で今回のように副音声を活用した。評判が良く、平昌では生中継をと準備してきたという。

担当する制作局文化・福祉番組部の戸沢冬樹エグゼクティブ・プロデューサーは「スポーツ中継や福祉目的に限らず、あらゆる人に向けた番組作りにこの経験を生かしたい」と意気込んでいる。【花岡洋二】

【ことば】副音声 テレビの音声多重放送で、通常の主音声とは別に送られる音声。リモコンの「音声切換」ボタンを操作して聞ける。スポーツ中継では初心者向けのルール解説、吹き替えの洋画では元の外国語の放送などがある。視覚障害者向けには、ドラマで情景描写を加えたり、民放がプロ野球を生中継したりしたこともある。

平昌パラリンピック 知的障害者の音楽団が公演へ

チューリップテレビニュース 2018年03月07日

平昌パラリンピックがいよいよ、9日開幕します。参加するのは、アスリートだけではなくありません。パラリンピックの文化イベントで演奏をおこなう県内の知的障害者の音楽団が、現地への出発を前に県庁を表敬しました。県庁を訪れたのは、県内の知的障害者で構成される音楽団「ラブバンド」のメンバーなど17人です。「ラブバンド」は、今月9日に開幕する平昌パラリンピックの文化イベントに2日間の日程で参加し、30分間の公演を2回行う予定です。副知事ら県の幹部を前に、演奏者を代表して川口良明さんが、公演への意気込みを語りました。今回の平昌パラリンピックでの公演は、25年前から県が、平昌のある江原道と友好提携を結んでいることから、招待されました。ラブバンドは、8日、平昌に向けて出発し、9日と10日の公演に臨みます。

スノーボードの楽しさ障害者も 二星HC

日本経済新聞 2018年3月7日

9日に開幕する平昌パラリンピックに日本は初めて、スノーボードの代表を送り込む。新種目として4年前のソチ大会で始まったのを契機に選手を発掘・強化し、パラ出場にまでこぎつけた立役者が日本チームの二星謙一ヘッドコーチ（HC、46）だ。障害を負ってもスノボを楽しみたいという1人の女性の思いを受けて活動を始めた原点を、今も大事にしている。



スノーボード日本代表の二星謙一ヘッドコーチ

二星HCはスノボのアルペンでユニバーシアード代表になるなど、1998年長野五輪代表を目指したがかなわず、プロに転向。2006年トリノ五輪に向けたスノボクロスの日本代表立ち上げにコーチとして関わった。並行して一般の愛好者にスノボを教えるキャンプを続けていた。

ここに40歳を過ぎてから参加したのが横浜市に住む調理師の山口明美さん（60）だ。山口さんは「生涯スポーツと思ってやり始めた」が5年後、バイク事故で左膝下を失い、義足となった。それでも再挑戦。二星HCらの指導で事故の1年半後には滑れる喜びを取り戻した。「両足が板に乗るので、体重の加減だけで滑っていった」（山口さん）

山口さんが義足仲間を誘って講習会を依頼したことをきっかけに12年、二星HCらが障害者スノーボード協会（京都市）を設立。14年には第1回の全国大会も開いた。

ここから平昌への奔流が始まる。ソチ大会でスノボが採用され、「普及啓蒙するのにパラリンピックははずせない」と意を決した二星HCが、スノボ部門がなかった競技団体の障害者スキー連盟に直談判。ゴーサインをもらい、平昌大会に向けナショナルチーム編成に乗り出す。

16年2月、「現地の人に通訳を依頼するなどの飛び込み状態」で選手2人を連れW杯に初参戦。国内では同年3月に2回目の全国大会を開いた。この情報を聞きつけてやってきたのが今回の日本代表、成田緑夢（近畿医療専門学校）と小栗大地（三進化学工業）だ。

第2回大会で優勝した2人は16～17年シーズンからW杯を転戦し、成田は金メダル候補、小栗も上位の常連にまで短期間で成長した。障害者の指導について二星HCは「装具や義足があれば健常者と同じ動きはできるので、できるだけ障害者とは見ない。足りないものを他で補う。筋力の弱い健常者が別のことで補うのと同じこと」と話す。自らの経験に、成田ら選手の意見を重ねて障害者にとって最適な滑りを常に探している。

二星HCが「大切な人」と呼ぶ山口さんは2月の第4回大会にも参加。「日本の初出場で盛り上がってスノボをする人が増えれば、また来年の大会が楽しくなる」と期待する。二星HCも普及啓蒙の活動を続けつつ、「4年後、8年後を見据えた選手・コーチの育成システムを作りたい。女子や上肢障害の選手も育て、他国に負けない人数をパラリンピックに参加させたい」と夢を膨らませている。（撰待卓）

北朝鮮団長「南の皆さんにお会いできてうれしい」 選手村であいさつ

共同通信 2018年3月7日

平昌冬季パラリンピックに参加するため韓国入りした北朝鮮の選手団と代表団24人が7日、平昌の選手村に入った。代表団の団長を務める朝鮮障害者保護連盟中央委員会のキム・ムンチョル委員長は「南（韓国）の皆さんにお会いできてうれしい」とあいさつした。多くの選手らは報道陣の問い掛けに無言だったが、笑みを浮かべて会釈する人もいた。韓国統一省によると、選手団20人は選手6人やサポートする保護者らで構成。選手のうち競技に出場するのは2人で、残る4人は「参観選手」としてバイアスロン競技などを観戦する予定だ。聯合ニュースによると、4人には2009年生まれで今年9歳となる少年も含まれ、障害者スポーツの普及や育成を図る狙いもあるとみられる。

食べ歩き用バウムなど魅力の新商品 京都で初の販売会 京都新聞 2018年03月08日 食べ歩きしやすいよう細長く加工したバウムクーヘン



障害者がフードコーディネーターやデザイナーらの助言を受けて開発した新商品の販売会が8、9日、京都市右京区の展示販売施設「ぶらり嵐山」で初めて開催される。食べ歩きが楽しめるバウムクーヘンや外国人向けの箸など約10点が並ぶ。

障害者が働く福祉事業所の収入や工賃を増やそうと、京都府が府内の7事業所にアドバイザーを派遣するなどし、魅力的な商品の開発を進めてきた。

販売するのは、観光客が持ち歩きやすいようにバウムクーヘンを細い棒状に加工してチョコレートで包んだ商品や、外国人向けに「京都」などの文字や紅葉の絵をあしらった箸、すし店をイメージした畳地のコースターなど。

商品の特徴や価格を表示するポップ広告や包装紙も工夫した。両日も午前10時～午後3時。

車ピカピカ 働く場広がれ 葛飾の支援事業所、障害者洗車サービス開始

東京新聞 2018年3月7日

そろいのTシャツを着て洗車作業をする里見幸太さん（右側手前）ら＝東京都葛飾区の奥戸福祉館前で



知的障害者の就労をサポートする東京都葛飾区の奥戸福祉館が、洗車サービス事業に挑戦している。障害者の働く職種を増やし、収入アップを目指す試み。出張も引き受け、地域との交流の広がりも期待する。障害者らは「ありがたいと言ってもらえると嬉しい」と意欲的で、丸山二美（ふたみ）館長（54）は「新しい仕事を知ってもらい、収入を増やしたい」と期待している。（飯田克志）

一月中旬、奥戸福祉館前の駐車場。白いミニバンを、里見幸太さん（44）らスタッフ三人が職員とともに洗っていた。そろいのTシャツと帽子を身に着けた「まごころ洗車隊」だ。

光沢を出す効果のある洗剤を車体に吹き付ける。汚れをタオルで黙々と拭いて落とし、別のタオルで水分を丁寧に拭き取る。窓もガラス専用洗剤できれいにし、三十分ほどで仕上げた。初めて依頼した男性（66）は「よく洗えている」と満足げに車に乗り込んだ。

社会福祉法人が運営する福祉館での仕事は、これまでパンやクッキーの製造販売、高齢

者施設などの清掃などが中心だった。しかし一年前、長崎県佐世保市の障害者就労支援事業者「フュージョン」の洗車事業を知った。力のいる作業がなく、障害があっても取り組みやすそうだった。丸山館長は「洗車を通じて地域との交流も深まってほしい」と挑戦を決めた。

福祉館の車などを使って練習を始め、昨年十月に仕事としてスタート。軽自動車や普通自動車は料金が千円で、手ごろさも売りだ。作業時間は二十～三十分ほどで、福祉館駐車場で行うほか出張も請け負っている（区外有料）。

里見さんたちは、これまでパン製造などを担当していたが、洗車について「もう慣れた」と胸を張る。ともに作業を担当する職員の佐藤晋平さん（41）は「お客さんからお礼を言われると、洗車した車以上にぴかぴかした笑顔になる」と顔をほころばせた。

◆賃金アップに職種拡大課題

一般企業への就職が難しい障害者や、障害者を支援する事業所にとって収入増は大きな目標だ。障害者の能力に応じて担える新しい仕事の開発も課題になっている。

事業所には、雇用契約を結び、最低賃金以上を原則支払う「就労継続支援A型事業所」や、雇用契約を結ばず、福祉的な面が大きい「就労継続支援B型事業所」などがある。

厚生労働省の二〇一五年度の賃金調査では、A型は月額平均で約六万七千八百円、B型は約一万五千円にとどまっている。NPO法人「就労継続支援A型事業所全国協議会」（東京都豊島区）の事務局は「単価の高くない仕事や商品が多く、一般の賃金より低くなってしまう」と話す。

協議会の一七年の調査（有効回答・九百四十二事業所）では、事業所の自主事業は農業が最多の百五十九カ所。次いで喫茶店・レストランの九十六カ所、弁当・配食・総菜の八十五カ所の順だった。事務局によると、このほかに清掃、チラシやダイレクトメールの封筒入れ、データ入力なども多いという。

事務局は「障害者のできる新しい仕事をつくるのは難しく、これまでの商品やサービスを一般に負けない質に高めることに力を入れているところが多い」と説明。高収入を得ている実践例を冊子で紹介することを検討している。

◆全国で27事業所

洗車事業のモデルとなった佐世保市のフュージョンは昨年1月、国内初という障害者による出張中心の洗車事業を開始。そのノウハウを基に知的・精神障害者らの就労を支援する東京、神奈川、埼玉など15都府県計27事業所が取り組む。都内では奥戸福祉館＝電03（5670）8111、東京自立支援センター（国立市）＝電042（576）9088＝が実施する。

支え愛 SASAEAI 被害者の切なる思い /高知 毎日新聞 2018年3月7日

性犯罪に関かわる刑法改正で、決死の覚悟をして実名で声をあげた詩織さん。けれどもものすごいバッシングが起きて「処女じゃないから、それほど騒がなくても」「売名行為だろ」などは序の口で、加害者も、不起訴になったのどと逆に彼女が加害者のごとく「しかるべき借置を取る」と言っています。捜査の段階でも、警察などの対応はあきれるばかり。性虐待問題では、このような2次被害が起きることが多いため、勇気を出して訴えることはほとんどないと言われます。

知的障害者のレイプ事件の加害者の身元引受人をしたことがあります。弁護士が見せてくれた調書の中には、目を覆いたくなるような写真が多くありました。被害者である少女も告訴状を書いた父親も知的障害があり、告訴が何かもわかっていないのに、告訴状には、私たちでも書くのが難しい専門用語が漢字で書かれていました。加害者の両親も知的障害、関係者は全て知的障害者という審判で、ひらがながやっとなという両親の調書にも、難しい漢字だらけで、書かされた調書であることは、一目でわかりました。

しかも10代である少女に、現場でポーズを取らせた写真があり、普通このような写真を父親が目に入れば、すぐにでも警察に飛んで行って文句を言い、訴えを取り下げると思

えるのですが……。警察は父親に現場検証がどんなものかを知らせてはいませんでした。彼女がどんな思いで、その時を過ごしたのかと思うと、加害者側の身元引受人と言う立場も忘れ、怒りすら覚えて、すぐに彼女への精神的ケアを関係者にお願いしました。

もともと、彼女が彼を一方的に好きになり、彼を追いかけ2人の関係が始まっており、一方的にレイプ事件の加害者とされてはいますが、そうではなく、知的障害者特有の一つのことに一生懸命になってしまう純粋さが起こしてしまった事件です。始めは彼女が必死で彼を追いかけていたのですが、体の関係ができると、彼がのめりこんでしまい、しつこく関係を迫ったというのがこの事件で、弁護士も「この事件は無罪を主張できますよ」と言われました。両者の聞き取りは全く進まず、肝心の時間や場所の特定する証言は、毎回違って警察も四苦八苦することが多く、いつまでも決定にまでは至らず、彼の拘留は長引きました。

私たちでも、何かあった時に、何月何日、どこで何が起きたのかをしっかりと覚えていて話すことは難しく、今は、防犯カメラやドライブレコーダーなどがあって、時間場所を特定できるけれども、防犯カメラなどがなければ、証明することは困難です。

彼、彼女のためにもこの審判が長引くことはよくないと考え、弁護士に「とにかく早く終わるように、彼が全面的に受け入れ謝罪することで決着させて欲しい」とお願いし、審判の下りた日にそのまま連れて帰りました。鑑別所の中で震えて過ごしていた彼は、やっと表に出ることができてほっとしたようで、保護観察が解けるまで、懸命に努力して仕事を覚えて就労し、自立に向けて再出発をしました。

また、DV加害者である夫が、被害者の妻に殺されたケースでは、用意周到で殺意があったと言われることがあります。ただ、暴力を受け続けた被害者にとって、加害者はものすごい恐怖であるため、何としても殺して自分も死のうと考えます。絶対的で暴力的な加害者を倒すには、弱い被害者は相手が眠っている時に確実にやるしか方法がないのです。にもかかわらず、発作的に行った殺人であれば、罪は軽くなっても、準備万端である殺人は罪が重くなるという矛盾があります。もちろん、どんな理由であろうと、人を殺すことは決して許されないのですが、そこまで追い詰められた被害者の声は届かないのです。こんな悲しい事件が起きる前に、助けてと言える世の中になればうれしく思います。<高知あいあいネット 青木美紀>

◆メモ 高知あいあいネット 〒780-0052 高知市大川筋2の3の29 いこいの場「あいあい」 電話 088・875・4751 メール kochi_aiainet@yahoo.co.jp
寄付金の振込先 四国銀行万々支店 0557970 高知あいあいネット

みんなの笑顔が喜び 高齢者5人で営むコミカフェ 神戸新聞 2018年3月8日

兵庫県豊岡市日高町祢布の木内玉枝さん(89)が、自宅の作業小屋を改装して作ったコミュニティーカフェ「心温まる憩いの処」が、地元住民らの交流の場となっている。80代後半にして一念発起し、2015年末にオープン。以降毎週火曜日に関き、木内さんと地域の70~80代のボランティア仲間が、常連客らをもてなしている。(阿部江利)

木内さんはこれまで30年近く、ボランティアを続けているという。小学4年だった孫を病気で亡くしたのを機に、「孫を支えてくれた方たちへの恩返しを」との思いで活動し始めた。高齢者や障害者らの支援に関わりながら、地元の農産物加工グループ「野いちごの会」にも所属。ほかのメンバーと一緒に、一人暮らしの高齢者に弁当を届ける活動にも取り組んできた。

ボランティアや常連客らに囲まれる木内玉枝さん(前列中央)
=豊岡市日高町祢布

数年前、同地区のスイレンの名所を見た帰りにコー



ヒーを振る舞ってもらった時、「お年寄りの話を聞くことなら私にもできるかも」とひらめいたという。物置にしていた小屋の壁を塗り替え、こたつなどを並べてくつろげるスペースを確保。野いちごの会で、同じ集落の仲間5人に協力してもらい、営業を始めた。

「こだわりの豆」を使ったコーヒーセットは100円。お盆にコーヒーのほか、メンバー手作りの折り紙細工に入れたお菓子、四季の花、「気に入ったら持ち帰って」という根付けなども乗せて出す。ほかにも抹茶（100円）もある。店の内外には、木内さんの生け花やメンバーの紙細工などがずらりと並ぶ。

準備は前日から始め、午前9時から午後3時まで営業。少ない日でも10数人が訪れ、茶飲み話を楽しんでいくという。

「私は場所を提供しているだけ。私が何にもしなくても、みんなええ人ばかりだから何でもして下さる。感謝、感謝」と木内さん。ほかのメンバーも「お客さんがたくさん来てくれて、笑顔でにぎやかに過ごしてくれるのを見るのがやりがい」と声をそろえる。

「私はこの土地が大好き。みんなが健康でいられて、1日でも長く続けられたらうれしい」。そう話す木内さんは、今日もにこやかに訪れた人を迎えている。

災害時に福祉用具提供 業者の協会と野田市協定 東京新聞 2018年3月8日

「災害時における福祉用具等物資の供給等の協力に関する協定」締結式
野田市・一般社団法人日本福祉用具供給協会



災害時の協力協定書を交わす鈴木有市長（左）と畔上加代子千葉ブロック長＝野田市で

野田市は災害時の要配慮者支援で、一般社団法人日本福祉用具供給協会（小野木孝二理事長）と協力協定を締結した。高齢者や障害者らに、避難所生活の長期化に伴い必要となる福祉用具などを提供してもらう。

市災害対策本部の要請に基づき、同協会が介護・衛生用品や電動ベッド、エアマット、歩行器、車いす、ポータブルトイレなどを提供する。

同市役所で先月、締結式が行われ、鈴木有市長と同協会千葉ブロックの畔上加代子ブロック長が協定書を交わした。鈴木市長は「協定の締結により、避難生活を余儀なくされた高齢者や

障害者らに、必要な物資がいち早く供給できる体制ができた」と話した。

同協会は全国の福祉用具販売・レンタル業者で組織している。これまで全国で100を超える自治体と同様の協定を結んでおり、野田市とは県内39番目の締結。（林容史）

県庁業務で経験積んで チャレンジ雇用募集 中日新聞 2018年3月8日 滋賀

障害者雇用の推進を図るため、県と県教委は十三日まで、知的・精神障害者が一年間の任期で臨時職員として勤める「チャレンジ雇用」の募集をハローワークを通じて行っている。業務の経験を積んでもらい、将来的な一般企業での正規雇用につなげる狙い。

チャレンジ雇用は、厚生労働省が省庁や自治体に呼び掛けている取り組み。県教委は二〇一五年度から行っており、今回は四人を募集。初めての実施となる知事部局では二人を募集する。

業務はデータ入力や、封筒の封入作業、文書のコピーなど補助的な事務を想定。雇用開始は知事部局は五月、県教委は四月で、いずれも来年三月まで。必要と認められた場合は更新もある。

県立図書館に配属された場合は週五日、一日五時間四十五分勤務で、ほかは月十六日、一日七時間四十五分勤務。報酬は月十万四千五百円で、日割り計算では一般の臨時職員と同額となる。

県人事課の担当者は「まずは県庁の仕事に携わってもらい、民間企業の就職につなげて

もらうステップアップの場と考えている。仕事の状況を見ながら、雇用枠の拡充も図って
いきたい」と話している。（角雄記）

資格不正取得に関与、医師37人を行政処分 読売新聞 2018年03月07日

厚生労働省は7日、精神障害者の強制入院などを判断する精神保健指定医の資格の不正取得に関与し、指定医を取り消された医師37人の行政処分を発表した。処分の内訳は1か月の業務停止20人、戒告が17人だった。発効は21日。同省の医道審議会医道分科会に37人の審査が諮問され、答申を受けて処分内容が決まった。同省は2016年、実際には診察していない症例レポートを提出するなどの不正をしたとして、19都道府県の指定医計89人の資格を取り消しており、今回の37人はこのうちの一部だった。

不要テニスボールで教室内の騒音を軽減 NECが出雲・長浜小に800個寄贈

産経新聞 2018年3月8日

教室の机や椅子が発する騒音の軽減に、不要なテニスボールを活用するNECの取り組みで、島根県出雲市の市立長浜小学校が7日、ボール800個の寄贈を受けた。同校では終業式がある23日、5年児童が机や椅子の脚に取り付ける作業に当たる。

NECは社会貢献活動の一環として、使用済みのテニスボールを集め、小・中学校へ寄贈する取り組みを平成15年に開始。昨年3月末までに、全国166校へ総計21万6千個を贈ってきた。これを知った学校側が同社に要請して今回の寄贈が実現。同社山陰支店（松江市）の倉持裕規支店長が校長室を訪れ、5年の児童らにテニスボールをプレゼントした。

島根県内の学校への寄贈は初めてのケース。ボールを受け取った藤原涼火さん（11）は「大事に使いたい」と礼を述べ、河井由依さん（11）は「机や椅子を引きずる音はうるさいのでありがたい」と話していた。板垣靖校長は「この春、聴覚障害児が仲間入りするので、静かに学習できる環境を整えたいと考えた」と寄贈を喜んでいる。

「あれがあれば…」避難所運営の初動キット、熊本大考案 朝日新聞 2018年3月7日

支援物資の箱を開けられない、携帯電話を充電するコンセントが足りない——。熊本地震直後の避難所で困ったことを調査した熊本大学の研究者らが、開設からの3日間に必要な25の道具と知恵を詰め込んだ「避難所初動運営キット」をつくった。「あれがあればよかった」という反省を次の災害時に生かそうと、今年1月中旬から販売している。

つくったのは、熊本地震前から防災教育に取り組んできた熊本大の竹内裕希子准教授（43）の研究室。発生後は学生ボランティアらと各地の避難所を支援した。実際に避難所を運営した自治会など21団体に、反省点や教訓を約1年かけて聞き取ったところ、避難者を受け入れる「初動」に問題が多かったことに気づいた。そこで、必要なものを集めたキットの作製に取りかかった。

まず、「火気厳禁」「土足禁止」「禁煙」などA4判の案内標識を20枚。「カセットコンロを使う人がいた」「土足での立ち入りを禁止するのに5日かかった」という声を踏まえた。「後から必要だと気づいた」という反省が多かった「女性更衣室」「女性トイレ」の標識も用意した。足りない時に手書きするスケッチブックも入れた。

熊本地震の教訓を詰め込んだ「避難所初動運営キット」と、竹内裕希子・熊本大准教授＝熊本市中央区の熊本大

6個口の電源タップは、「充電用コンセントの奪いあいになった」という声から。カッターナイフは「支援物資の段ボール箱を開けるのが大変だった」からだ。油性マーカーは「中身が分からなかった」という段ボールに記



入するため。黄と黒色のトラロープやテープは、危険な所への立ち入りを規制するのに加え、「後から通路を確保するのが大変だった」との反省も生かした。

さらに、45リットルのポリ袋は「いろんなことに使える」と30枚入れた。ゴミ袋にも敷物にもポンチョにもなる。ホワイトボード代わりにしていた避難所もあった。

竹内さんは「キットの完成度は8割。それぞれの避難所に合わせて調整して、完成させてほしい。使い方を考えるのも備えです」。

すでに約500セットを熊本県内の全市町村に民間の寄付を受けて贈った。税別2万7千円。問い合わせは、熊本大可まもと水循環・減災研究教育センター（096・342・3489、ファクス兼用）。（渡辺純子）



避難所初動運営キットの中身

使用マニュアル▽案内標識20枚一式▽腕章5枚▽スケッチブック1冊▽軍手10組▽電源タップ6個
口1本▽ハサミ1本▽カッターナイフ1本▽45リットルポリ袋30枚▽マスク7枚▽ばんそうこう1箱▽ブルーシート約6畳1枚▽油性マーカー赤3本、黒5本▽ボールペン黒10本▽消しゴム付き鉛筆12本▽鉛筆削り1個▽トラロープ1本▽トラテープ1巻▽布粘着テープ1巻▽養生テープ2巻▽メガホン1個▽保安指示灯1本▽懐中電灯2本▽単3アルカリ乾電池8本

しあわせの村、子育て世帯は駐車場無料 18年度から 神戸新聞 2018年3月7日



子育て世帯を呼び込むため、駐車料金を無料にするしあわせの村＝神戸市北区（神戸市提供）

神戸市北区の総合福祉施設「しあわせの村」に子育て世代を呼び込もうと、同市は2018年度から、18歳未満の子どもを含むグループを対象に、駐車料金を無料にする。開村以来初の取り組み。19年に迎える開村30周年に向け、老朽化した温泉や体育館を含む施設全体のリニューアルについても検討を始める。

しあわせの村は約205ヘクタールの広大な敷地内に、子どもたちが楽しめる大型遊具や芝生広場のほか温泉もあり、週末は家族連れなどでにぎわう。しかし、2000年度に約210万人いた入場者数は減少傾向をたどり、16年度には約193万人になった。

17年度に外部有識者を交えて施設全体のあり方を検討する中で、子育て世帯のニーズに応える必要性がクローズアップされた。駐車場の無料化はその一環。現在は1時間以上利用すると、障害者、宿泊者以外は1日500円（普通車）かかる。4月以降、週末を中心に18歳未満がいるグループの無料化を試行し、その後本格的に始める予定だ。

また、開村30周年を1年後に控え、全体のにぎわいづくりにつながるリニューアルの基本計画を18年中に決める。温泉や体育館が入る施設の改修や、医療・介護の先端技術を体験できる施設の新設などを検討するという。（若林幹夫）

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も

